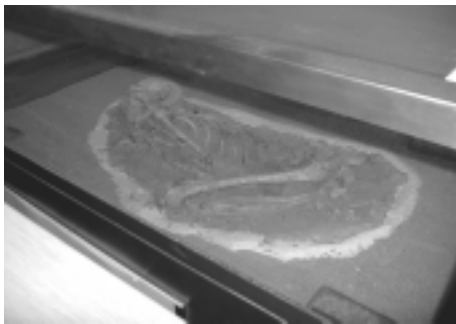


知られざる広大



広大は広い大学です。

総科生にはあまり知られていない場所もたくさんあるのではないのでしょうか。

キャンパス内にある、珍しいものを探してきました。



○水槽展示○

泳ぐ魚を間近に見ることができ、素敵なスポットがあります。生物生産学部C棟二階ロビー、総科の方から入ってすぐのところにある、水族生態学研究室の水槽展示です。日当たりの良いロビーできれいな魚を眺めていると、とても落ち着きます。

しかし魚の方は、のんびりしてばかりもいられません。同研究室の河合先生によると、水槽の魚は雄ばかりで、そのうち、大きい個体ほど色つやが良くなっていくのだそうです。そして小さい雄は、徐々に色あせていき……。そんなことに注意しながら見るのも、面白いかもしれません。

水槽の内容は変えることもあるそうなので、気に入った方は、何度も行ってみたいはいかがでしょう。



○呉海軍工廠の大天秤○

理学部E棟B一階、階段の脇の少し奥まったところに、大きな天秤が展示されています。理学部の実験用大天秤です。もともとは呉の海軍工廠で使われていたもので、戦時中は魚雷の火薬装填に使用したとされています。

便利な道具は、兵器の生産にも使われれば、学問の発展にも貢献する。戦中戦後を見てきた大天秤が、何かを伝えようとしているようにも思えます。

○メンデルのブドウ・ニュートンのリンゴ○

理学部の正面入り口近くに、ブドウの木とリンゴの木が植わっています。ただのブドウやリンゴではありません。実は、非常に由緒のあるものなのです。

ブドウの木は、かの遺伝学のメンデルが実験に用いた木から株分けしたものです。そしてリンゴの木は、ニュートンが万有引力の法則を発見するきっかけとなったと伝えられる木から接木したものだそうです。このような歴史的に価値のあるものが、身近なところにあったとは驚きです。



○植物管理室・生態実験園○

理学部の南側に広がっているのが、植物管理室と生態実験園です。順に紹介します。

植物管理室は、管理棟、複数の温室、樹木園、実験圃場からなる施設です。このうち大温室、樹木園、実験圃場は、平日の八時三十分から十七時三十分の間、自由に見学することができます。珍しい植物が栽培されており、さながら小さな植物園です。

生態実験園は、「人と自然との触れ合いの場」として創られた場所です。西条盆地の里山を保全する試みがなされており、水田もあります。終日一般公開されており、散策のための歩道も設けられています。ただし、通路以外に入らないなど、利用者の注意を守って見学しましょう。



○教育学部棟の中庭○

東広島キャンパスには大きな建物が色々ありますが、その中でも教育学部棟は、なんと中庭付きです。それも、ひとつだけではありません。建物に四方を囲まれた中庭が、大小三つあり、それぞれの趣を持っています。

話の種に、一度見物してみたいかがでしよう。



○地下道○

東広島キャンパスの地下には、長い地下道が走っている。そんな噂を聞きつけ、問い合わせしてみたところ……ありました！埋設された電気、水道などの設備を保守点検するためのもので、人が通れる広さがあるということでした。

そう言われてみれば、キャンパス内には電線が見当たりません。なるほど、キャンパスのすっきりした景観は、地面の下に秘密があったのですね。



○考古学・出土遺物展示○

文学部考古学講座の発掘調査で収集された、様々な出土資料の展示です。場所は、文学部研究棟二階の廊下。

展示されているのは、広島をはじめ中・四国地方で出土した資料と、西アジア、アフリカでの出土品が中心となっています。中でもイラン高原で発掘された土器や青銅器は、極めて貴重なものです。また広島県北東部の帝釈峡遺跡群では、自然科学分野とも連携した石器時代の総合的な研究が行われているということで、その成果の一部をここで知ることができます。

誰でも気軽に見学できるのも、この展示の魅力です。興味のある方は、ぜひ一度訪ねてみてください。



〈番外編〉

○広大前交番○

その名のとおり、広島大学の前にある交番のご紹介です。私たちの生活を支えてくれる重要な場の一つですが、普段、交番の前を通って、気づいたことはありませんか？ 飲酒運転注意や指名手配犯のポスターではありません。交番のデザインです。奇妙な形をしているなど感じている人がいるかもしれませんね。その人は少なくとも、私より、観察力がありません。私はまっ

たく気づきませんでした。この交番は西条町中央にある、三ツ城古墳で出土した*土器をイメージして作られたそうです。土器をイメージしているとは、考えもませんでした。こんな毎日の風景にも、いわれがあるとは驚きです。

今度、交番の前を通るときは、デザインにも注目してみてください？

*古墳自体をイメージしたとする説もあります。



担当 18生 荒川 洗一
五十嵐 太郎

広島大学を歩いてみよう



広島大学総合博物館

「小さくてもきらりと光る」

決して大きくはないけれど、小さいからできることもある

「大学丸ごとミュージアム」

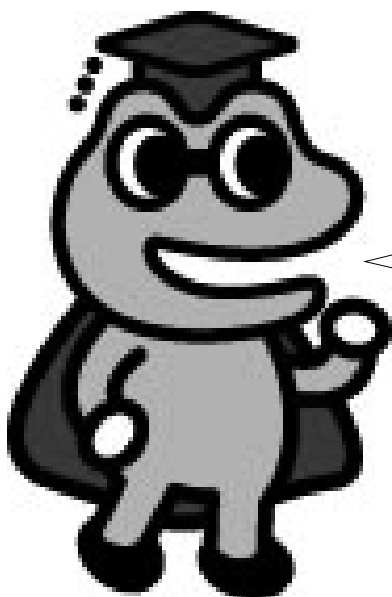
自然豊かな広島大学だからこそ、できることがある

平成18年11月1日にオープンした

広島大学総合博物館

その館長である岡橋先生にインタビューに行ってきました

博物館のイメージキャラクターのHirog



利用案内

【時 間】

10:00~17:00 (入館は16:00まで)

【休館日】

日曜、月曜、祝日
年始・年末 (12月28日から1月4日)

【入場料】

無料

【H P】

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/museum/index.html>

◇総合博物館ができるまで◇

現在日本の国立大学には、大学博物館というものが旧七帝大と鹿児島大学にあります。

しかし、かつて日本には、まともな博物館が大学にはありませんでした。そこで十年ほど前に、文部科学省が大学にも博物館を作らなくてはいけないと、事業を始めました。その時に旧帝大七つと鹿児島大学に博物館を作りますということで、文部科学省が予算や人を手配してくれて、大学博物館が全国に出来たわけです。

広島大学でも、実はその頃に文部科学省からいくらお金を貰って、博物館を作ろうという運動がありました。そして実際に、文部科学省に何回もお願いにいったのですが、残念ながら結果は駄目でした。「広大にも博物館を」ということで盛り上がっていた空気も、そこで一気に盛り下がってしまったわけです。

しかし、平成十五年に、「これじゃいけない！」というので、文部科学省にはお願いせずに、新しい形……自前で広島大学はやるうじやないかということになりました。それから約二年半かけて、なんとか昨年四月に設立されたんですよ。設立にいたるまでの期間が短いといえば短いです。



博物館の入り口。「開館中」の文字の下には、イメージキャラクターのヒログの姿が。

けど、全く前とは関係なく、全く新しい構想として大学博物館を考えました。だから、最初はどこに出来るかもわからなかったんですよ(笑)。とにかく、文部科学省の事業の時とは違った形で、広島大学でできる範囲で考えてくれということで、そのとき僕が中心になって、全学部からいろんな人を集めてきて委員会を作り、構想を作りました。

そして、目玉である本館の常設展示を、平成十八年十一月一日からオープンしました。学祭にあわせてね。

◇総合博物館の特徴◇

「文部科学省から予算をいただいで作った」のが第一世代の大学博物館で、僕らのような「自前でやって、身の丈にあったものを作ろう」というのが第二世代の博物館であると、僕は言っています。

この第二世代の特徴は、簡単に言うとう算もない、スペースもないということです。そういう制約のある中で、いかに皆さんに認めてもらえるものを作るかというのがこの最大のポイントでした。ドカンとやるなら作りやすいのですが、僕らは制約条件の多い中で、しかし人が見て喜んでもらえるもの、良かったなって思ってもらえる物をどうやって作るかということを考えつつ、構想を練りました。

はつきり言えば、お金を湯水のように注げばもっと良いものができるんですよ。だけれども予算の制約の中で、しかしクオリティを下げるとやっぱ駄目だと……ある意味これはギリギリの戦いですね。何とかこの形で、ギリギリで作っているんですよ。

いろんな見方があるし、立派な博物館もいっぱいあるけれども、僕らはクオリティとしては博物館のクオリティを守っているつもりなんです。ちゃんと、博物館の展示作業などを専門に請け負っている業者に

やってもらっていますしね。今はプリンタが良いから、はっきり言えば展示パネルなんかも自分で作れるんですよ。だけど、今この博物館にあるようなパネルのデザインには絶対にならないです。このデザイン性ってというのが僕らも分かったんですが、僕らは今、自分たちでパソコンでああいうふうなイラスト的なものが作れるんだけど、それを博物館の業者に渡したら、出来栄が全然違うんです。やっぱり博物館の業者に頼まないといけませんね。化石の展示でも、綺麗に見せるためにちょうど良い台の高さや傾け具合があって、博物館の業者の人とこちらのスタッフがいろいろ協議しながら作ってきました。

そういう点で、狭いけどいろいろ気を遣って作ってきているんですよ。

◇博物館の展示品たち◇

広島大学って、ここに来るとなるとけっこう不便ですよ。だから、ここにたまたま来まして言う人はいないんですよ。わざわざ来るしかない。すると、博物館としてどういう人をターゲットにすべきかと言うと、近くに住んでいる人、つまり地元の人ですよ。地元の人といえば、大人もそうだけど、小学生とか中学生とかもいます。

そういう人に来てもらうためには、身近なテーマを取り上げるべきじゃないですか。そこで僕たちは里山と里海に帰着しました。



干潟のジオラマ。干潟の動物たちもほとんどが本物とのこと。

瀬戸内海はどうか、中国山地はどうなのか、自然学習が身近なものからできるのがいいなって。だから、里山の展示はお客様を想定して作っています。もしも展示が「俺たちはこんな良い研究しているんだぞ、自慢してやるよ」っていうものだったら、小学生とか来ませぬよね。なにが面白いのか分からないですから。

展示物の中で、特に注目してほしいのは干潟のジオラマ（模型）ですね。大きいほ

うの干潟は、このスタッフで学芸職員の水水さんが自ら海にもぐったりして材料を取ってきて、専門の業者をお願いしてできたんです。

それから日野化石コレクション。日本でもここにしかないものもあって、なかなか充実していますよ。

展示物はほぼ毎日のように更新されています。今はとくに化石が増えていきますね。

展示物の隣にある説明も、人の意見を聞きながら日々増やしていったりと、いろいろ工夫しています。どんどん充実させていきたいですね。



アンモナイト（左）とウミユリの化石。

◇総合博物館のコンセプト◇

うちの博物館のコンセプトはキャンパスまるごとミュージアム。かっこよく言えばエコミュージアムっていう概念なんです。「建物の中だけではなく外も博物館にしよう!」というもので、フランスなどで実施されています。なぜそれを取り入れたかというと、広大は非常に自然豊かなんですよ。はつきり言って、そこが他の大学にはない広大の魅力なんです。大学内に川もある池もある山もある。だからある意味、里山なんです。それを活かすために、大学丸ごとミュージアムというのを思いつきました。



里山展示の数々。里山の動物たちのはく製がずらりと並んでいる。



日野化石コレクション

来年から自然観察会などをやる予定なんです。いろんな学部がありますが、大学のことを知るために、こういう一つの博物館の中で全部判ろうっていうのには無理がある。

だから、それぞれの学部博物館的なものを作ってほしいと思っています。要するに、自分たちの部局の玄関に、ウェルカムの大本を示してほしいと思う。

例えば今、文学部にはショーケースを二つ置いて、そこにコレクションを展示しています。すると、来られた方が文学部ってどんな所かかっていうときに、何もない場合よりも文学部内に入っていくやすいですよ。だから、そこには常にコレクション

を置いています。二階にも考古の展示物がありますよね。

こういうふうに、各部局に少しずつ博物館的なものがあることが必要だということで、平成十九年の三月頃から、生物生産学部と埋蔵文化財調査室に小規模な展示施設を作る予定なんです。だから、教育学部とか総合科学部とか理学部とか……みんなちよつとずつやってほしいなと思いますね。

◇館長から見た総合博物館◇

「小さくてもきらりと光る」というのがありますね。決して大きくない、しかし小さくてもきらりと光るものがある。それから、負け惜しみではないですが「疲れない博物館」、「疲れなくてリラックスできる博物館」というのがありますね。

私はこの博物館が気に入っています。自分たちで考えながらやってきたわけですから。みんなで汗を流して、いろいろ工夫して……。こういう小さいところだから、手作り感覚でやれたんだと思います。

そういう意味で、私はこの博物館を一つの作品だと思っていますね。

担当 18生 五十嵐 太郎
伊東 遥
小野 未千恵